

地域再生と創造都市

ゲスト 大阪市立大学大学院創造都市研究科 教授 都市研究プラザ 所長 佐々木雅幸氏

聞き手 総合研究開発機構 理事長 伊藤元重

■ 「創造都市」論・「クリエイティブ・クラス」論の展開

伊藤 近年、「創造都市」や「創造階級」をめぐる議論が日本でも盛んにされるようになってきました。今では金沢市や横浜市などで、「創造都市」を標榜した施策が進められています。先日、NIRAでも研究の成果として、『創造都市への展望 都市の文化政策とまちづくり』という著作を刊行したところです。本日はその編者として、また研究会の座長としてご貢献いただきました佐々木先生にお話を伺いたと思います。最初に、「創造都市」や「創造階級」という概念が登場してきた背景についてお話しいただけますか。

佐々木 「創造都市(クリエイティブ・シティ)」とは、市民の活発な創造活動によって先端的な芸術や豊かな生活文化を育み、革新的な産業を振興する「創造の場」に富んだ都市を意味します。ヨーロッパにおいて1990年代中ごろに、都市論や文化経済学、都市経済学などの領域で、創造都市の議論が登場してきました。ちょうど、日本ではバブル

が崩壊して、景気が悪くなりつつある時期で、それまで主流だった「世界都市」モデル（ニューヨークやロンドン、東京などがその代表的な都市ですが）を追うような形で、創造都市モデルが出てきたわけです。その背景には、アジア諸国の追い上げでヨーロッパ経済が空洞化し、特に工業都市が衰退して失業者が増え、都市が危機的な状況に直面し、それをどう打開するかという状況がありました。

伊藤 具体的にヨーロッパで馴染みのある都市としては、どこでしょうか。

佐々木 典型的なのは、例えばスペインのビルバオやフランスのナントなどの造船業主体の工業都市です。ビルバオでは、1996年にあの有名なグッゲンハイム・ミュージアムをつくり、芸術を一つの起爆剤として都市再生に取り組みました。スペインのバルセロナやフランスのリールなどもそうです。またロンドンもブレア政権が登場して、「クリエイティブ・ロンドン」と呼ばれるようになります。そして私自身が最も注目しているのは、アメリカ人で都市研究に大きな影響を与えたジェイン・ジェイコブズがまさしく「クリエ



いとう もとしげ
NIRA 理事長

イティブ・シティ」と呼んだ、「第三のイタリア」の都市ボローニャです。私は80年代後半からボローニャ・モデルを軸にして日本の地方都市のあり方を考えるようになり、99年からミレニアムにかけてこの地に留学した経験があります。

伊藤 いずれも歴史的な実績のある都市ですね。では、そうした都市を舞台に、都市論としてはどのように展開されているのでしょうか。

佐々木 90年代から2000年にかけて、創造都市関係の出版が相次ぎます。一つは、98年に、ロンドン大学の都市論の大御所であるピーター・ホールが、創造都市の歴史論ともいえる大著『文明における諸都市』を上梓します。アテネに由来する都市の歴史を、都市が持つクリエイティブ・ミリュー（創造的な環境）とイノベティブ・ミリュー（革新的な環境）という二つの側面を軸にして、現代に至る都市の発展を

論じています。その後、イギリスの都市プランナー、チャールズ・ランドリーが2000年に『クリエイティブ・シティ』という本を出し、これが爆発的に売れました。

伊藤 ヨーロッパを背景としたランドリーの創造都市論には、どのような特徴がありますか。

佐々木 ヨーロッパでは失業者の問題や移民の社会的排除の問題が深刻ですので、ソーシャル・インテグレーション（社会的統合）ないしはソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）というテーマが創造都市論において大きなウエートを占めています。

伊藤 一方で、アメリカのリチャード・フロリダの翻訳が、日本でもつい最近出ましたが、創造階級の議論はアメリカから出ていますね。

佐々木 フロリダが2002年に『創造階級の勃興』を出したことにより、アメリカにも創造都市論の波が押し寄せることとなりました。フロリダはその本の中で、各種のプロフェッショナルや芸術家・アーティストなどの「創造階級」が好んで居住する都市や地域こそ、経済的パフォーマンスが優れていることを、指標を用いて分析しました。ちなみに、日本で出ている翻訳書は、2005年に書かれたものです。フロリダの議論と重なり合う形でジョン・ホーキンスが『クリエイティブ・エコノミー』を、そして、それを追いかけるようにし、リチャード・ケイプズが『クリエイティブ・インダストリー』を書いています。

伊藤 ヨーロッパとアメリカでは都市の社会的背景も異なりますし、創造階級や創造都市論においてもアメリカ的な固有の文脈がありそうですね。

佐々木 クリエイティブ・インダストリーやクリエイティブ・エコノミーといった場合、ヨーロッパでは主として文化産業と、日本でいうコンテンツ産業を指します。それに対してアメリカの場合は、R & Dも加わり、マルチメディア系のアートやパフォーマンスアートを中心にした文化産業のみならず、自然科学、あるいはバイオテクノロジーの研究開発まで含んでいる。したがって、クリエイティブ・クラスの幅も非常に広がってきます。また、アメリカの創造都市論には、都市が新たに競争力を取り戻すという議論が強く出ています。フロリダは、9.11テロ事件以降、アメリカが内向きになり、クリエイティブな人材をいかに外に逃がしているかについて随分憂えています。

伊藤 アメリカで創造都市といえは、どういう都市を指すのですか。

佐々木 フロリダの議論では二つのタイプがあって、一つはグローバルな競争力を持つ都市が磁石のように創造階級を引きつけながら一層競争力を増していくような都市で、代表的なのがサンフランシスコです。もう一つは、それほど注目されていなかった都市に、特定のIT産業が集積することによって創造階級が集まってきた、例えばオースティンのような都市です。

伊藤 創造都市の議論は最近、日本だけでなく韓国や中国などにも広がってきているようですね。アジアでの状況



ささき まさゆき 氏
大阪市立大学大学院創造都市研究科教授
都市研究プラザ 所長

についてはいかがでしょうか。

佐々木 ここ数年、私は、創造都市関係の会議で、韓国や中国、台湾へ呼ばれましたが、アジアでは、アメリカ的な都市間競争の議論が強く反映されています。興味深いのは、中国ではこれから本格的に大量生産・大量消費方式が全土に広がろうとしている一方で、上海ではその時期をもう通り越して、まさにクリエイティブ・エコノミーが出現してきていることです。シンガポールは香港を意識しながら、「ルネッサンス・シティ」を掲げています。世界各地で、創造都市という議論がいろいろなバリエーションをもって展開し始めています。

伊藤 かつてNIRAでは世界都市論の研究などもやっていましたが、今は、東京やニューヨークなどの巨大都市が注目された時代から、グローバルなレベルで都市論が大きく転換している時代といえますね。では、世界都市、ないしはグローバル・シティの行方をどのよ

うに考えたらよいのでしょうか。

佐々木 9.11 事件を一つの契機として、明確に世界都市の話題性から創造都市へ移ったと言えらると思います。もちろん、依然としていくつかの都市は、グローバル経済の中心にありますし、例えば東京は、グローバル・クリエイティブ・シティと表現しています。特定の都市がグローバル性とクリエイティブ性を兼ね備えるということはあると思います。ただ、クリエイティブ・シティのほうが、概念としては広いですね。

■ 製造業中心の大量生産型から知識情報経済の時代へ

伊藤 お話を伺っていると、創造都市論というのは都市における人間の行動、特に働き方の変化と大きく関わってきているようですね。労働には三種の種類があると、以前にある人から聞いたことがあります。牛馬のように働く labor と、より一般的な仕事としての work、さらにプレーヤー的な仕事の三つです。クリエイティブ・クラスというのは、おそらくプレーヤー的な仕事に従事している人たちですね。

佐々木 そのとおりです。基本的に labor はラテン語では「ラポール」といって奴隷の仕事、work はラテン語では「オペラ」といい、音楽作品のオペラや芸術作品のオペラなど、楽しんでやる仕事を意味します。製造業時代の大量生産型工場で働くというレイバーやラポールから、知識情報経済化におけるオペラとかプレーヤーへの移行、と

いう流れが見られます。

伊藤 ある有名な経済学者が書いているのですが、街を歩いていたら、おじさんがつまらなさそうに石を一生懸命彫っている。何をしているのか聞いたら、「ここで石を彫らなきゃいけないんだ」と。少し先に行ったら、今度は別のおじさんがうれしそうに石を彫っている。何をしているのか聞いたら、「これで自分は芸術作品をつくるんだ」と。同じ作業でも意義づけやモチベーションによってもまったく変わってきます。

佐々木 その違いは大きいですね。

伊藤 都市論の転換は、都市政策のあり方にも大きく関わってきますね。

佐々木 従来の地域政策的、都市政策的な観点から見ますと、製造業ベースですから、まず何といっても基盤整備をして工場用地をつくるということで、土地とか労働力、水資源、あるいは道路の整備を行い企業の立地環境を整えることが開発政策の中心でした。一方、私もフロリダも共通しているのは、ジェイコブズを一つの理論的な先駆者と見なしているのです。「ジェイコブズ効果」と呼ばれることもあるのですが、魅力的な都市にクリエイティブな人々が集まって住む。彼らがそこでさまざまな出会いをマネージする、あるいはそういう舞台をつくってこそ創造的な活動が広がってくるという論理です。まず産業立地政策ありきではなくて、人に注目する。そのためには、都市が創造性を発揮させるような場 「クリエイティブ・ミリュー」を持つことが重要です。

伊藤 おっしゃるように、日本の戦後の都市や国土のあり方を考えると、製鉄所や造船所を誘致するという形で都市が繁栄していきました。しかも完全な分業型でした。例えばオフィス用地、教育の地域、工場用地、住宅用地などに分けられていました。

佐々木 そうです。いわゆる用途別に土地を区画する、それが近代の都市計画だと考えられていたのです。ところが、ジェイコブズは、それでは区画内に特定のタイプの人たちだけが住んでしまって退屈な地域になると、異議を唱えました。ニューヨークの下町に彼女は住んでいたのですが、朝帰りの人もいれば、日中に働いている人もいる。学者もいればミュージシャンもいる。そうしたさまざまな人たちが同じ地域に暮らし、そこで生じる多様な交流こそが創造性を創出するのだと主張しました。実際に、ニューヨークの工業専用地域であったソーホーのロフトなどが空洞化した後にアーティストが住み着くことがきっかけとなって、クリエイティブな場になったりしました。

伊藤 そのようなことは、いかにもニューヨークのソーホーや東京の下町、ロンドンなどでは起こりそうですが、例えば人口規模の小さな都市でも創造都市になることは可能なのでしょうか。

■ 地域に固有の文化的資源を発見する

佐々木 ニューヨークのソーホーのようなものを真似ればよいというのではなく、重要なのはそれぞれの都市が持

っている固有の歴史的文脈、それを現代風に再評価、再編集していくということです。京都ならば西陣の町家がそういう場所ですし、金沢にも江戸時代から続く町家があり、そこに職人やアーティストが住んだりしています。かつてのような金太郎飴的な開発ではだめで、それぞれの都市の固有の文化的な背景を読み解かなければいけない。これは従来のプランナーではできないんですね。

伊藤 そうでしょうね。確かに、日本の都市はほとんどが戦後の高度経済成長の中でミニ東京化してしまい、静岡も浜松も名古屋も、新幹線の駅を降りると同じような駅ビルがあり、どこの街だか区別がつかない。ただ、金沢や京都の場合は戦災にあわなかったし、歴史的遺産に恵まれているので例外的なのかもしれません。それ以外の都市が創造的になるには、どういう手法が可能だとお考えでしょうか。

佐々木 横浜市がチャレンジングな試みをしています。京都には 1,200 年、金沢には 500 年の歴史があるけれども、横浜は 150 年に満たない。でもそれなりに固有の歴史性があって、意外に近代建築の良いものが残っています。ちょうど銀行の再編で使わなくなった古い建物 1929 年に開設された旧第一銀行と旧富士銀行の横浜支店と馬車道支店 を活用して、Bank ART (バンクアート) という実験的な事業を始めました。公募方式で管理運営をアート NPO に任せ、そこを「創造界限」と呼んで横浜の創造都市の目玉事業にした

のです。このように、歴史がないような街でも、案外資産が残っていたりします。大阪では木津川沿いに使われなくなった小さい造船所のドックがあって、そこをアートの拠点にする計画が30年ぐらいかけて行われています。

伊藤 アートではありませんが、神戸の元町のデパートが、その周りの倉庫を活用して店舗にしていますね。もう少し規模の小さな都市や歴史的建造物が必ずしも残っていない都市などはどのような可能性があるのでしょうか。

佐々木 工場地帯だった所は、まさに廃工場跡が強みとなります。ある種20世紀の負の遺産に息吹を与えることができます。

伊藤 それぞれの地域が自分の街をよく見て、今まで廃墟や時代の遺物だと思われていたものが、実は非常に大きな価値を持っているかもしれないという発想で探していく、ということですね。

佐々木 はい。そして、それを発見するのは住人よりも、意外に外からきたアーティストだったりするんですよ。アーティストの国籍も問わないほうがよい。大阪に阪堺電車という古い路面電車が今でも走っているのですが、先日、これをオランダ在住のアーティストが地元の人にはできないような斬新なペインティングで、駅まで全部塗り替えました。経済や金融だけでなく、コンテンポラリーアートの世界もグローバル化していて、アーティストが世界中を飛び回っている。彼らを上手に受けとめて、地域に眠っている資源を再編集していくようなプ

ロデューサーやコーディネーターとしての役割を發揮してもらおうと、街は変わっていきます。

伊藤 松本市のサイトウキネン・オーケストラには、ベルリンフィルの首席ティンパニー奏者が必ずいますが、彼がいるとやはり違うのです。小沢征爾さんのつくる場面がすばらしいのは、その世界で一流のプレーヤーを呼んでいることです。松本という街は、このサイトウキネン・オーケストラのおかげでとても活気づいたのではないのでしょうか。

佐々木 それも一つの創造都市としての展開だと思います。必ずしも物的な資源だけではなく、人的な資源も重要ですし、あるいは街に眠っていた記憶を呼び起こすことも広い意味の文化資源になり得ます。

伊藤 歴史も文化資源ですね。歴史はとても重要ですが、日常生活の中でそれを市民が意識することは、案外難しいのです。私は静岡出身ですが、NHKの「風林火山」を見るまで、甲府と静岡の歴史的つながりに気づいていませんでした。

■ 創造的な社会システムの構築へ

伊藤 これまでの話からすると、創造都市、文化・芸術や地域資源を活用した、ある種のクリエイティブな都市改造論といえるかもしれませんね。それによって都市を魅力的にする。では、その先に何が出てくるのでしょうか。創造都市がその先に目指すものとは……。

佐々木 私の本の読者から、「創造階級とは、つまりクリエイティブに生きられるのは、結局ごく一握りの人だけということですか？」とよく聞かれますが、そうではないのです。すべての人が持つ潜在的な創造性を引き出し、皆が創造的に生きられるような社会にしていくこと、それこそが創造都市の目標なのです。障害者や老人、ホームレスなどの弱者と呼ばれる人たちがどうしたら創造的になっていけるのか。格差社会では特に重要な問題となります。

伊藤 つまり、社会的な統合をより意味のある形で進めていく、ということですね。

佐々木 創造的な社会（クリエイティブ・ソサエティ）への過渡的現象としてニートやフリーターと呼ばれる人たちが増えてきて、彼らは楽しい仕事である「オペラ」はよいけれど、きつい労働の「ラポール」はやりたくない。クリエイティブに生きたいと思っているのに、実はクリエイティブに生きるための社会のシステムが追いついていない、という問題があるのではないのでしょうか。

伊藤 創造都市とは、社会システムを変え、創造的な社会を創っていくことを目指す、ということになるわけですね。そして、その引き金を引くのがアーティストであったりする。ただ、先ほど分業の問題について触れられましたが、アーティストという仕事こそ、画家なり音楽家なり、分業の極みのような気がするのですが。

佐々木 そういう意味では、職業的に自立しているアーティスト以外に、例えば工場で4時間働いている人が、あとの4時間はアート活動も行うというように、誰もがアーティストになれるような時代に入っていきのかもしれない。

伊藤 つまり、皆がクリエイティブに生きていくためには、ワークシェアリングの仕組みが必要ということになりますね。

佐々木 もう一つの課題は、持続可能性です。21世紀の重要なテーマは地球環境であり、地球全体が持続可能であるためには、都市のあり方を変えていく必要があります。例えばコンパクトシティという議論は、かつての経済成長の時代に人口が増え、都市が郊外に拡大した結果として都心が衰退したので、都心をクリエイティブな場所として見直し、郊外化に歯止めをかけようというものです。

伊藤 コンパクトシティの議論はもっともなのですが、都市単位の人口が多いアメリカと違って、日本ではこれから人口が減っていきます。それに、日本で今都市と名乗っている全国の何百、何千の都市が全てコンパクトシティを言い出したら、ちぐはぐで、創造性を刺激する都市とは逆行するような状況になる懸念がありますね。

佐々木 アメリカよりもヨーロッパの都市の方が参考になるかもしれません。規模的にも人口50万程度で大きな都市ですし、100万を超える都市は少ない。中規模の都市がネットワークをつくっ

て連携しています。30万から50万という規模は、宇沢弘文先生の言われる最適都市の範囲ですね。日本の大都市圏は世界的に見てもメガロポリスで、かなり特別です。東京都などは、むしろ23区をそれぞれ一つの単位として見ていった方がよい。北陸ですと、金沢が45万、富山が42万、福井が27万で、都市間の連携関係がまだ残っています。

■ 創造都市を支える産業の可能性

伊藤 そうした30万から50万の都市では、創造都市論から見たときに、どのような産業が出てくるのでしょうか。

佐々木 それぞれのタイプがあって、金沢を例にとると、日本の伝統産業が今でもしっかり残っており、ハイテク系の産業の中にも職人氣質が残っています。そうした中で、伝統工芸や、和装産業が、デザイン産業あるいはコンテンツ産業と結びついて新しいファッションやインテリアを開発するなど、グローバルに展開できるような企業群が出てきている。これが一つのモデルです。

伊藤 和装の話にも関係するのですが、つくづく思うのは、日本の場合、非常に分業化しているということです。たとえば背広は愛知県の一宮が産地で、オーストラリアから持ってきた原料を糸メーカーの間屋が介在し、機屋、紳士服メーカー、さらにアパレルメーカーが入り、最後に小売業が日本のマーケットに売っている。ある意味で分業の効率化はしていても、一つの閉じた

仕組みなのです。一方、ミラノの郊外にピエラという村がありますが、ここではとてもゆっくりとしたペースで、我々の手に入らないような、デパートで買うと30万円もする高価な背広をつくっていて、その大半が海外のマーケットに出ています。金沢の伝統産業や、少し付加価値の高い産業には、従来の日本の流通システムとはかなり違ったやり方が必要になってくるかもしれませんね。そして、金沢の良いモノを最も理解してくれているのは、ヨーロッパかもしれません。

佐々木 そうですね。現に、金沢の漆器屋さんがヨーロッパで展開しています。私は、ボローニャのようにイタリア的モノづくりを日本で展開するとしたら、金沢がモデルになると唱えてきました。それから、愛知県は私の出身地で、一宮といえば、ノムラテックスという紳士服屋さんが、2年前に竹の繊維から服をつくりました。竹の繊維はにおいが残らず、アレルギーを持っている人にも良いのだそうです。その会社は、竹から取り出した繊維で織るという特許を取りました。ところが、その際に国際特許を取らなかったで、海外では通用しない可能性があるわけです。名古屋には特許に関する専門サービス業は十分に集積していないんですね。つまりクリエイティブ経済にとって大事なものは、ビジネスに的確なアドバイスができる知的所有権や特許の専門家がいることなのです。

伊藤 ところで、金沢は伝統的なものをうまく育てながら、産業をグローバ

ルに展開し、創造都市として成功している事例ですが、そのような都市は日本にどのくらいあるのでしょうか。

佐々木 松本や桐生などをはじめ、そこそこあると思います。問題は、自らの都市の個性を十分に認識して、創造的な政策を立てる能力を持った行政マンやプランナーが不足していることです。日本は高度成長以来ずっと縦割り行政で、国の基準に合わせてすべてやってきたため、行政がそこから脱しきれていない。つまり、最終的には行政がクリエイティブにならないと創造都市にはならないと思います。横浜がなぜ勢いがあるかという、中田市長が我々の意見を採用し、思い切って、文化・芸術政策と産業政策、そして都市計画の縦割りを改めたからです。そして、市役所の中にいるクリエイティブな人材を、庁内公募で募って集めました。

伊藤 縦割りではなく、政策を総合的にやる必要があるだし、行政をいかにうまく動かすかにかかっているわけですね。

佐々木 加えて、それを支える民間のNPOや経済界のネットワーク、連携も必要です。金沢の成功要因の一つは、金沢経済同友会が2001年から金沢創造都市会議を開いていることで、市長も必ず参加します。日本は今、転換期ですから、思い切ったことをすべきですね。そして、例えば創造都市研究所のような機関をつくるとか、創造都市の指標づくりなども有効だと思います。NIRAの研究でも方法論など前提となる議論をし

ましたが、指標は行政の目標になりますので、日本の現状に合ったものをつくっていく必要があります。

■ イノベーションからインプロビゼーションへ

伊藤 佐々木先生目からご覧になられて、目下、日本で動きのある注目すべき都市はどこだと思われますか。

佐々木 『創造都市への展望』でも取り上げた福岡や札幌、仙台、盛岡、北九州、それに京都や神戸などが挙げられますし、大阪もやっこの1年ぐらいで動き始めました。従来型のハコモノ行政や、ゼネコン型、補助金行政から早めに転換したところが先を行ってますね。浜松市も創造都市を目指したいと言っています。ここは中小企業の力が日本では有数で、楽器産業は盛んですが、実は音楽文化がありません。

注目したいのは、比較的中小の規模の街、あるいは地方の中核都市で文化政策を上手に採用している都市です。それから、木曽町が創造都市というのを農村でやってみようとしています。「創造農村」とでもいいでしょうか。ここは昔の中山道の宿場町でした。職人がいたり、ヴァイオリンをつくる工場があったりして、そうした素晴らしい資源を生かしたまちづくりをすればいいですね。また、九州の由布院は、中谷さんや溝口さんという宿の主人の方たちが文化人ですから、街中が美術館のようになっています。小さい街でもやればできるんです。

伊藤 これは私の偏見なのかもしれませんが、住民は都市を一つの与えられた環境として考えることが多い。それを自分たちが動くことによって、より良くつくり変えていけるんだという、ある種の楽観主義や期待を抱くことが、残念ながら非常に少ないような気がします。そこに火をつける必要がありますね。

佐々木 日常的なコミュニティで、小さくても、いくつかの実験的プロジェクトが見える形で動いていることが大切です。ゼネコンが高層ビル群を建てるのがまちづくりではなく、例えばごみ捨て場であった場所が、とても面白いスペースに変わっていく、というような経験が大事です。実際にカナダのモントリオールでは、巨大なごみ捨て場の改造が、近隣コミュニティの人たちも参加しながら進められています。

伊藤 実験的なプロジェクトに、住民が参加するということが大事なんですよ。

佐々木 海外の創造都市と呼ばれるところでは、特に貧しいコミュニティや失業者が多い地区、工場跡などで、効果的な小さなプロジェクトが展開されています。イギリスではコミュニティアートという分野がありまして、失業者の多いコミュニティにアーティストを派遣し、一緒に作品をつくることを通じて社会参加を促します。

伊藤 金沢や横浜など、都市モデルとしての成功事例をつくっていくことも重要ですね。

佐々木 モデルは絶対必要です。日本の創造都市は、金沢だけならそれほどインパクトはなかったでしょう。横浜が動き出したことにより、大きく変わり始めたと思います。

伊藤 今日のお話を伺っていて、生活の単位としての都市を総合的に見直し、いかに独自性を発揮していくのか、それが都市を活性化する大きなメルクマールになるのだと思います。

佐々木 ジェイコブズは、創造都市の中で起こるのはイノベーションだけではなくて、インプロビゼーション（即興的連鎖反応）だと言っています。インプロビゼーションはこれまでの経済学の用語にありませんね。

伊藤 ジャズにはありますけどね。

佐々木 まさしくジャズのインプロビゼーションのようなことが次々起こってくるからこそ、創造都市であることのゆえんだと言っています。

伊藤 それはゲーム理論でいうと、新しいタイプが出てきて、それが新しい価値をつくっていく、いわゆるエボリューションゲームということになるのでしょうか。今日はどうもありがとうございました。

（了）

2007年5月22日

大阪市立大学都市研究プラザにて

（編集主幹：加藤裕己NIRA客員研究員）

佐々木 雅幸（ささき まさゆき）氏略歴

1949年、名古屋市生まれ。京都大学経済学部卒、同大学院経済学研究科博士課程修了、京都大学博士（経済学）。

大阪経済法科大学経済学部専任講師、金沢大学経済学部助教授、同教授、ポロニア大学客員研究員、立命館大学政策科学部教授を経て、2003年より大阪市立大学大学院創造都市研究科教授。2007年、大阪市立大学都市研究プラザ所長に就任。グローバルCOE拠点リーダー：プログラム名「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」。
文化経済学会<日本>副会長。

1999年度に金沢市文化活動賞、2003年度に日本都市学会賞を受賞。

主要著書に、『創造都市への挑戦』（岩波書店、2001）、『創造都市の経済学』（勁草書房、1997）、NIRA編『都市空間を創造する - 越境時代の文化都市論』（分担執筆）（日本経済評論社、2006）、『CAFÉ 創造都市・大阪への序曲』（編著）（法律文化社、2006）、『創造都市への展望 - 都市の文化政策とまちづくり』（NIRAとの編著）（学芸出版社、2007）他多数。

対談シリーズ

対談シリーズは、NIRAホームページでご覧いただけます。

<http://www.nira.go.jp/introj/10/rijityo/taidan/index.html>

(肩書きは、対談時のもの)

- 第11回*** 2006年12月 **水不足がもたらす成長の限界**
- 世界経済にとって石油以上に深刻な問題は水不足だ
ゲスト：伊藤忠商事(株)取締役会長 丹羽宇一郎氏
聞き手：NIRA理事長 伊藤元重
- 第12回*** 2007年1月 **リニア技術が日本を強くする**
- 超伝導技術の応用が生み出す新たなブレイクスルー
ゲスト：東海旅客鉄道(株)代表取締役社長 松本正之氏
聞き手：NIRA理事長 伊藤元重
- 第13回** 2007年2月 **M&Aで企業はどう変わるか**
ゲスト：GCA(株)代表取締役 佐山展生氏
聞き手：NIRA理事長 伊藤元重
- 第14回*** 2007年2月 **連続社長インタビュー「省エネ技術で企業は勝つ」**
ゲスト：本田技研工業(株)取締役社長 福井威夫氏
シャープ(株)代表取締役社長 町田勝彦氏
東京電力(株)取締役社長 勝保恒久氏
聞き手：NIRA理事長 伊藤元重
- 第15回** 2007年2月 **種苗ビジネスにおける技術革新と国際化**
ゲスト：(株)サカタのタネ代表取締役社長 高橋英夫氏
聞き手：NIRA理事長 伊藤元重
- 第16回** 2007年3月 **現場から見た地方自治の課題と対応策**
ゲスト：鳥取県知事 片山善博氏
聞き手：NIRA理事長 伊藤元重
- 第17回** 2007年3月 **金融のグローバル化から見たわが国金融市場とアジアゲートウェイの課題**
ゲスト：東京大学大学院法学政治学研究科教授 神田秀樹氏
聞き手：NIRA主席研究員 大飼重仁
- 第18回** 2007年5月 **女性、ネットワークの可能性**
ゲスト：(株)イー・ウーマン代表取締役社長 佐々木かをり氏
聞き手：NIRA理事長 伊藤元重
- 第19回** 2007年6月 **医療システムの課題**
ゲスト：慶應義塾大学医学部医療政策・管理学教室教授 池上直己氏
聞き手：NIRA理事長 伊藤元重
- 第20回*** 2007年6月 **鉄は、すり合わせで進化する**
- 海外メーカーに先を越されない高級素材の開発力
ゲスト：日新製鋼株式会社 代表取締役社長 鈴木英男氏
聞き手：NIRA理事長 伊藤元重

* 月刊『Voice』(PHP 研究所)から転載。

NIRA 総合研究開発機構
National Institute for Research Advancement

〒150-6034 東京都渋谷区恵比寿 4-20-3
恵比寿ガーデンプレイスタワー34階
TEL:03-5448-1735 / FAX:03-5448-1745
URL: <http://www.nira.go.jp/menu2/index.html>